

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 宮田 義矢

本論文は中華民国時代の民間宗教教派の一つである道院を対象とする教団研究である。民間宗教教派とは明清時代以降の儒・仏・道教に属さない宗教教団を指し、道院は1921年に山東省済南で乩壇（扶乩という占いを行う団体）から発展した教団であって、下部の慈善組織、世界紅卍字会の名で知られる。本論文は道院を題材とし、教団が宗教や慈善といった近代的な概念と価値観をどう受容、内面化し、またそれに対抗したかを明らかにした。序章、第1～5章、終章、それに参考文献一覧からなる。

序章で本論文の基本的な視点を示したあと、第1章は道院設立前後の経緯を扱う。道院の前身は地方政治家を中心とした乩壇に過ぎなかったが、他の宗教教派の影響を受け、扶乩によって最高神の託宣を經典にまとめ、独自の教義を整備していく。その過程で内丹という道教に由来する修行法を中心に据える一方、多くの教派が共有していた無生老母という神への信仰とその救済論は受容しなかった。

第2章は道院の經典を基にその教義を分析する。道院の經典の中では歴史は原初の一気（理想状態であり、最高神）からの段階的な墮落として描かれ、最悪の状態から原初状態への回帰がなされるという終末論が濃厚であるが、重要なのは人の心であり、人心の墮落は災害をもたらすが、内丹の修行によって原初の気質を回復すれば、災害を未然に防ぐことが可能であるとされる。

そのため世界の救済のために修行をし、かつ慈善活動を行うことが、道院の活動の柱になった。その慈善活動は社会的にも評価されるのだが、道院はむしろ修行を重視する発言をするようになる。それを分析したのが第3章であり、宗教と慈善を区分した上で、後者のみを重視する世俗的な考え方に対する反発が内面の重視となって表われたと論じる。第4章でも、内面的修行に基づく外面的慈善という考え方が、世俗的慈善団体に対する対抗言説となって表れたと指摘する。

第5章は、儒・仏・道教・キリスト教・イスラームを一致させるという「五教合一」という道院の教義について論じる。五教合一の考え方自体は道院の独創ではないが、1920年代の反宗教運動に対抗して、世俗主義を心の軽視として否定しつつ、相互に対立する諸宗教をも批判し、諸宗教の総合を通して平和をもたらし得ると訴えることで、自らを超宗教として位置づける戦略であったことを論じる。

本論文は、中国の近代化の中で導入され生まれた「宗教」概念とイメージに対し、一教団がその思考枠組みを受容しつつも、それに対抗する論理を構築する過程を描き、それを通して中国における近代的「宗教」概念の成立を考えるものになっている。もとより一教団を対象としたケース・スタディであるので、近代中国における宗教全般に対する論及が不十分である嫌いはあるが、個別教団研究としては高い水準のものであり、特に道院の教義をテキストに即して分析している点は、先行研究の欠を補うものとして高く評価できる。よって審査委員会は博士（文学）を授与するのに値するものと判定した。